

令和8年度協働パイロット事業新規事業二次審査 会議録

開催日時 令和8年6月4日(木) 午後1時30分から午後5時00分まで

出席者 委員 川村 美智、弓削 幸恵、千野 和子、石川 賀久
事務局 渡井 亮祐、前川 里奈、今西 真紀

会議内容

1 新規事業二次審査説明 <事務局>

2 議事

(1) えがお

ア 企画説明 <団体>

イ 発言等

(千野委員)

幼児を対象とした日本語教室とのことだが、日本人の親子にも参加してもらい、交流することは考えているか。

(団体)

野外活動では、日本人の親子にも積極的に声を掛け、一緒に活動する機会を設けている。一方、教室では、参加する子どもの多くが日本語でのあいさつや会話が難しい状況であるため、現時点では日本人の幼児と一緒に支援することは考えていない。

(川村委員)

参加者は様々な国にルーツを持ち、母語も異なると思うが、どのように教えるのか。

(団体)

日本語を日本語で教えるという形を基本とし、ジェスチャーや絵を用いて支援している。また、保護者もある程度日本語を理解しているため、どうしても伝わらないときは、保護者に通訳してもらおうなど工夫しており、今のところ大きな支障はない。

(川村委員)

今回の提案は、現在実施しているスマイルクラスをさらに充実・発展させるという位置付けでよいのか。

(団体)

そのとおりである。団体単独での広報には限界があり、参加者の拡大には行政と

の連携が必要であると考えている。

(弓削委員)

昨年度は11回実施したとのことだが、継続して参加している親子はいるのか。

(団体)

継続的に参加しているのは2組である。子どもは参加を希望していても、土曜日は保護者が休息を優先することもあり、参加につながりにくいケースが多い。一方で、教室を楽しんでいると思って毎回来てくれるようになった家庭もいる。教室の楽しさ、面白さが伝わるような周知の仕方は考えないといけないと感じている。

(弓削委員)

土曜日は休みたいという保護者の思いがあると、開催日を土曜日としていることも参加者が集まりにくい要因になっていると感じる。

(団体)

現在は、天候にも左右されるほか、会場内の児童館へ子どもが行ってしまうこともあるため、案内表示を分かりやすくするなど、工夫して対応している。

(弓削委員)

他団体との交流を通じて外国人コミュニティとの接点を持つとしているが、具体的に想定している団体はあるか。

(団体)

静岡市国際交流協会や地域日本語教室を実施している団体との連携を考えている。また、団体メンバーが所属する外国人コミュニティや静岡県立大学とのつながりも活用していきたい。

(川村委員)

親子を対象にした取組を学校やこども園につなげていく視点は非常に良い着眼点である。一方で、有度地域を対象としているため、子どもたちは将来的に各地域の小学校へ進学することになる。学校との連携や、進学後につながりを継続できる仕組みについてはどのように考えているか。

(団体)

現在は運営体制に余裕がなく、まずは幼児向け教室を軌道に乗せたいと考えている。もちろん、小学校低学年向けの教室についても必要性を感じているので、体制が整えば他地域への展開も検討したい。

(弓削委員)

静岡市に担ってほしい役割が示されているが、どのようなことを市と実施することを期待しているのか、協働の意義みたいなところを具体的に教えてほしい。

(団体)

外国にルーツを持つ保護者は、学校から配布される文書の内容が理解できず、期限や手続が分からないまま困っていることが多い。そのため、行政から情報提供を

受け、それを分かりやすく伝えたり支援したりする役割を団体として担っていき
たい。また、行政と連携することで、学校との橋渡し役として保護者の不安や負担
も軽減できると考えている。

(弓削委員)

保護者の困り事を把握し、行政へつなぐ役割を担うことで、学校や行政にとっ
ても課題解決につながると感じる。そうした橋渡し役としての協働の意義を、ぜひ事
業の中で生かしてほしい。

(団体)

入学時に必要な書類や学校からのお便りなども、内容が理解できず困っている
家庭が多い。過去には学校のお便りを「やさしい日本語」にした資料を作成したが、
十分に活用されていない状況もある。行政との連携を深めることで、こうした資料
の活用や情報提供を進め、外国にルーツを持つ家庭への支援につなげていきたい。

(2) 特定非営利活動法人静岡市障害者協会

ア 企画説明 <団体>

イ 発言等

(川村委員)

自治会ごとに防災への取組状況に大きな差がある。積極的に避難所運営の検討
を進めている自治会がある一方で、防災訓練程度にとどまっている自治会もある
ため、自治会全体で取り組むことの難しさがあると思う。提案内容は課題を整理し
た良い取組だと感じるが、このような現状を踏まえ、どのように進めていくことを
考えているか。

(団体)

地域ごとに温度差があることは認識している。そのため、まずは防災意識が高く、
取組ができそうな地区をモデル地区として選定し、実践を通じて課題やノウハウ
を整理したいと考えている。

(石川委員)

受入体制や避難環境について検討する会議は、何回程度開催する予定か。また、
それはモデル地区で実施するのか。

(団体)

モデル地区において実施する予定である。現在、三者会合は年1回程度で開催し
ているが、会を開くこと、会うことが目的となってしまう。課題整理や役割
分担を進めるためにも、必要に応じて年2～3回程度開催できるよう働きかけて
いきたいと思っている。

(千野委員)

自治会役員は地域によって交代が多いと思われるが、取組を継続するためのマ

ニユアル等を作成する予定はあるか。

(団体)

事業を通じて整理した課題やノウハウは記録として残し、今後の横展開につなげたいと考えている。今回の取組だけでは冊子化まですることは難しいと思うが、継続的な取組として活用できる形で整理していきたい。

(弓削委員)

専門家による講座を2回開催する予定とのことだが、講師謝金として計上している7万円の積算根拠と、人件費の考え方について教えてほしい。

(団体)

講師謝金は、災害福祉分野の専門家への謝金約5万円と、東京からの交通費を含めて1回当たり7万円を見込んでいる。講師については2名を想定している。

また、人件費については、団体の活動として、本事業を時間外で実施することを想定しており、その時間外勤務相当分を積算して計上している。

(3) ShizuokaGame-Based Learning Lab

ア 企画説明 <団体>

イ 発言等

(千野委員)

プログラミング教室に通うことが難しい子どもたちにも参加してもらいたいとのことだが、どのように周知し、参加につなげることを考えているか。

(団体)

参加費は無料とする予定である。周知については、教育委員会を通じて学校へチラシを配布し、それを見た子どもや口コミなどを通じて参加してもらうことを想定している。

(千野委員)

定員40名とのことだが、応募者が多数となった場合はどのような基準で参加者を決定するのか。

(団体)

先着順を予定している。今回実施してみて参加ニーズを把握した上で、来年以降は、企業等からの協力も得ながら受入体制を拡充し、より多くの子どもが参加できる仕組みづくりにつなげたいと考えている。

(川村委員)

完成した作品を発表するとのことだが、著作権の取扱いはどのようなになるのか。

(団体)

制作した作品の権利は制作者である子どもが持つことになる。また、作品を公開する際には決まった表記を行うことで、ホームページ等への掲載も問題なく実施

できると認識している。

(弓削委員)

40名が参加する場合、パソコンは1人1台用意する想定か。また、当日は慣れない子どももいると想定されるが、何人くらいのスタッフで対応していくことになるのか。

(団体)

プログラミング教室で使用しているパソコンを持ち込み、1人1台使用できるよう準備する予定である。運営については、スタッフ1人当たり6人程度対応が可能と考えており、7～8名程度のスタッフを配置する予定である。

(弓削委員)

今回のような2日間の事業は初めてとのことだが、仮に採択されなかった場合は実施しないのか。それとも何かしら実施してみようと考えているのか。

(団体)

採択されることを前提に準備を進めているが、仮に採択されなかった場合でも、規模や内容を見直しながら、何らかの形で実施したいと考えている。

(川村委員)

2日間という短期間で作品を完成させることは可能なのか。

(団体)

昨年度、プログラミング教室で同様の取組を実施した際は、2時間程度で作品を制作することができた。今回は2日間、約12時間を確保しているため、より完成度の高い作品制作が可能であると考えている。また、1日目と2日目の間に家庭で作業を進めることも可能かと思う。

(川村委員)

役割分担表には5名の名前が記載されているが、それ以外にもスタッフはいるのか。

(団体)

大学生のアルバイトスタッフがおり、さらに静岡理工科大学の学生ボランティアにも協力を依頼したいと考えている。年齢の近い学生が関わることで、子どもたちも参加しやすい環境になると考えている。

(弓削委員)

将来的には学校や地域クラブとの連携も考えているとのことだが、学校ではネットワークや情報セキュリティ上の制約もある。学校での実施は現実的に可能なのか。

(団体)

技術的には実施可能であるが、ゲームを学習に活用することへの理解や、学校で使用する端末・ネットワークの運用ルールなどが課題になると考えている。学校側

の理解が進めば実施できる可能性はあるのではないかと思う。

(弓削委員)

学校現場では様々な制約があるため、まずは学校外で実績を積み、その成果をもとに学校へ展開していくというのがいいのかなと感じる。

(団体)

学校の先生にも事業を見学してもらうことで、取組への理解を深めてもらいたいと考えている。

(弓削委員)

事業はいつ頃実施する予定か。

(団体)

具体的な日程は未定であるが、子どもたちが参加しやすい夏休み期間での実施を想定している。

(4) 特定非営利活動法人結楽

ア 企画説明 <団体>

イ 発言等

(石川委員)

学校での福祉教育を2校、計9回実施する計画となっているが、新年度が始まっている中で実現可能なのか。

(団体)

興津小学校とは日頃からつながりがあり、校長先生へ本事業を説明したところ、4年生の授業として実施したいとの意向をいただいている。また、もう1校についても昨年度から関わりのある学校であり、受入れに前向きな意向を確認していることから、計画どおり実施できると考えている。

(千野委員)

ユニバーサルスポーツを一種目以上開発、継続支援としているが、具体的にはどのような方法で子どもたちと一緒に競技を作り上げていくのか教えてほしい。

(団体)

まず、学校の授業の中で、子どもたちと障害当事者が「誰もが楽しめるスポーツとは何か」を一緒に考えながらルールや内容を検討していく。その後、地域を交えたワークショップを開催して意見交換をしながら作っていきたいと考えている。

(川村委員)

昨年、同様の授業を実施したとのことだが、実際にどのような成果があったのか。

(団体)

昨年度は3回の授業を実施し、障害当事者と子どもたちが一緒にユニバーサルスポーツについて考えた。子どもたちが様々な工夫を提案し、多くの人が楽しめるス

スポーツづくりにつながったことから、本事業でも同様に子どもたちの発想を生かした競技を創出できると考えている。

(弓削委員)

既存のユニバーサルスポーツを基に工夫を加えるのであればイメージしやすいが、新たなスポーツを一から考えるのは、中々大変なのではないかと思う。事業を進めるに当たり、専門的な助言を行う講師はいるのか。

(団体)

ユニバーサルスポーツの講師が関わっている。講師から専門的な助言を受けながら、障害当事者とともに、多くの人が楽しめるスポーツの内容を検討していきたいと考えている。

(弓削委員)

ノベルティグッズやニュースポーツ開発費など、予算が全体的に高い印象を受ける。それぞれの積算根拠について教えてほしい。

(団体)

ノベルティグッズについては、事業の周知や継続的な活用を目的として、長く使用できるものを製作したいと考えている。そのため、一定の製作単価がかかるほか、継続的に活用するとなると、金額が高くなってしまう。

また、ニュースポーツ開発費については、子どもたちのアイデアや講師の助言を踏まえながら用具を新たに製作・改良することを見込んだうえで計上している。

(弓削委員)

体験会やイベントの開催を予定しているとのことだが、会場や開催回数はどういうように考えているか。

(団体)

会場については、市と連携しながら、IAIパラスポーツパークや庵原球場周辺、地域の交流館などを会場として活用し、12月頃から体験会や地域イベントを年間4～5回程度開催する予定である。

(石川委員)

課題テーマは「庵原から全国へ」を掲げている一方、実施予定校は庵原地区ではないが、その点はどのように考えているか。

(団体)

現時点では採択前のため調整は行っていないが、採択された場合は庵原地区の小学校にも協力を依頼し、事業を展開していきたいと考えている。

3 採択事業審査

ア 新規事業の採択可否

(事務局)

採点結果を参照し、委員長を中心に採択団体の決定をしていただきたい。なお、新規事業に採択される事業は、各審査委員の評価点の合計が260点以上であることを要する。各審査委員の評価点の合計が260点を越えた団体は、えがおの314点、特定非営利活動法人静岡市障害者協会の288点である。

(川村委員)

えがおは、学校から配布される文書や就学準備に関する支援など、外国にルーツを持つ家庭が抱える具体的な課題を把握し、行政へ提案・共有していく取組につながれば、パイロット事業としての意義は大きいと感じる。

(弓削委員)

協働事業として実施することで担当課との連携が進み、学校や行政との調整もしやすくなると思う。事業を通じて得られた成果や課題については、関係部署へ積極的に情報共有してほしい。

(千野委員)

多文化共生という分野には様々な問題がある。今回は幼児に限った提案であったが、日本人の親子も参加できる遊びや交流の場の中で日本語を学べる仕組みとすることで多文化共生の推進にもつながるのではないかと感じた。

(川村委員)

子育て支援センターなど、親子が日常的に集まる場所を活用することで、より参加しやすい事業となることが期待できると思う。教室形式による支援と、遊びを通じて自然に日本語を身に付ける手法についても、今後検討してほしい。

(事務局)

事業を広げていくためには、人材や資金など運営体制の強化が必要ではないかと意見があったが、この点についてはどうか。

(川村委員)

地域で活動する日本語教育ボランティア団体や大学等と連携し、それぞれの団体の強みを生かすことで事業の継続性や発展が期待できると思う。

(弓削委員)

大学生や高校生が活動に参加することで、支援者の裾野を広げるとともに、学生にとっても学びの機会になると思うので、検討してほしい。

(川村委員)

特定非営利活動法人障害者協会については、課題の整理や事業の必要性は感じる一方で、福祉避難所へ移るまでの間を一般の避難所でどのように過ごすかという視点において具体的な手法の検討が必要だと感じた。

(石川委員)

これまでも避難行動要支援者への支援は課題となっていたが、様々な理由から取組が進まなかった経緯があるのだと考える。本事業によって前進することを期待したいが、実現できるか。

(千野委員)

モデル地区での取組を他地域へ横展開することが本事業の目的の一つであるが、地域ごとの状況が異なる中で、モデル地区での成果をどのように展開していけるのかが気になる。

(弓削委員)

新たに研修会を設けるのではなく、地域の負担を考慮し、既存の会議や研修の機会を活用するなど、地域の実情に合わせた実施方法を検討して欲しい。

(川村委員)

自主防災組織の研修会など既存の場を活用し、その一部として講座やワークショップを実施する方法であれば、地域の負担を抑えながら取り組める可能性があるのでは。

(千野委員)

ShizuokaGame-Based Learning Labについて、事業内容は民間でも実施できるので、行政と協働する目的や役割分担が十分でないという印象を受けた。参加費を負担することが難しい子どもを対象とするのであれば、先着順ではなく、行政と連携した周知方法や対象者へのアプローチをしてほしかった。

(弓削委員)

学校との連携について具体性がないと思う。デジタルだけでなく、静岡市の地域資源や素材に直接触れに行く内容を取り入れることで、教育的な面から効果が高まるのではないかと考える。

(川村委員)

ゲームを入口として子どもの興味を引く着眼点は良いと思うが、教育的な視点や、生活困窮世帯など支援が必要な子どもたちへのアプローチがあまりなかった。

(弓削委員)

中学生の部活動の地域移行を踏まえると、文化系の活動の受け皿となる取組は需要があると思う。一方で、ワークショップを実施して発表会で終わるだけでは、事業としての意義や継続性が見えにくく、どのようにつながっていくのか疑問に思った。

(川村委員)

市との協働という部分で、今一步だったように感じる。地域に移行するという点を踏まえると、もう一步踏み込んだ展開を期待したかった。

(川村委員)

特定非営利活動法人結楽について、発想自体は良いものの、事業として考えた場合の費用の妥当性や実施規模については検討が必要だと感じた。

(弓削委員)

事業費の積算根拠については、妥当性に疑問が残る。学校で子どもを対象に実施するのであれば、既存の資源を活用できる可能性もある。また団体内で対応できる人材もいて、外部に発注するわけではないのであれば、積算の内訳について整理が必要なのでは。

(川村委員)

具体的にどのようなスポーツを実施するのかが見えにくい。ノベルティグッズについても、どの程度のものを想定しているのか。

(弓削委員)

障害者スポーツといっても対象となる障害の種類は幅広く、どこに焦点を当てるのかを明確にしたほうがいいのでは。ユニバーサルな視点で取り組む場合、検討すべき要素が多くなり、事業化の難易度が高くなるため、既存の種目を軸として発展させていくほうが進めやすく、ゼロから新しいものを作り上げることは難しいと感じた。

(千野委員)

発想は良いが、新たなスポーツを作るという取組のイメージが分からない。どのようなものが適切か、試行錯誤しながら進める必要があるため、とても大変なのは。事業の規模や内容とのバランスについても検討が必要だと思う。

(川村委員)

それでは、新規提案で2次審査対象となった4事業のうち、各審査委員の評価点合計が260点を超えている2事業（えがお、特定非営利活動法人静岡市障害者協会）を採択候補とすることとしてよい。

(全委員)

異議なし

4 事務連絡

5 閉会

以上、この会議録が正確であることを証します

署名人

川村 美智